

「ミキハウス物語」
高級子供服づくりに
徹して50年――



ミキハウスグループ代表
木村 皓一の



本誌主幹
村田博文

「世界の子供に 笑顔と安心を！」

第17回

人情味のある大阪・河内の風土が育んだ経済人との交流

大阪府八尾市は「ミキハウス創業の地。大阪府の南東部に隣接する町で、東側には大阪と奈良を分ける生駒山地が広がる。この八尾を拠点に、木村は「世界の子供服づくり」を目指してきた。八尾は多くの人材を輩出。元通商産業省（現経済産業省）の役人、現在、経営コンサルタントや人材育成など、幅広く活躍する一柳良雄もその一人。その一柳とは40年来の親交が続く。初対面の時に「すごく真面目で誠実な人だな」と役人らしくない人と木村はその印象を語る。同じく大阪出身の元通産官僚で作家の堺屋太一（故人）とも親交のあった木村。大阪への熱い思いを持ちながら、常に世界に目を見開き続ける者同士との交流とは――。（敬称略）

大阪・八尾の 同じよしみで…

「僕の友達で、松下幸之助さんがつくられたP.H.P.研究所に入ったのが、僕が八尾で創業してしばらくして、「八尾の出身で面白い奴がおるぞ」と言っかけてもらったんです。」
一柳良雄との出会いについて、木村はこう切り出した。一柳との初めての出会いは、木村が八尾で創業して5年が経った時だった。

一柳良雄。1946年（昭和21年）1月3日生まれ。68年東京大学教養学科国際関係論分科を卒業し、通商産業省（現・経済産業省）に入省。

73年ハーバード大学ケネディスクールを卒業し、70年代後半に国際エネルギー機関（IEA・パリ）に出向し、省エネルギー課長をつとめるなど、国際問題やエネルギー情勢に精通した官僚として頭角を現した。

若き頃、当時の通産大臣をつとめた宮澤喜一、田中角栄（共

に後の首相）両氏の秘書官をつとめた。また、村田敬次郎・通産大臣の秘書官をつとめた後、93年近畿通商産業局長、96年総務審議官を歴任して、98年に通商産業省退官という足取り。

「僕が一柳さんと知り合ったのは、一柳さんに次男が生まれた年でした。今から45年前です。よ、だから、次男ももう結婚だと思えます。」

木村はもともと滋賀県彦根市の生まれ。彦根出身の父が大阪で繊維製品（アパレル）の事業を営んでおり、3歳の時、彦根から大阪へ家族と共に引っ越してきた。

木村は幼少時、小児麻痺にかかっており、大阪の病院で治療を受けるためにも、父の事業所の近くに家移した方がいいという父の判断もあった。

それから、小・中・高校と大阪市内で過ごした。その後「世界一の子供服をつくる」という志を抱いて、1971年（昭和46年）に起業す

るのだが、創業当初のことだから資金は潤沢ではない。まず、生活費や事業経費が大阪市内より安いところを、ということでも近郊の八尾市に居所を定めた。

「僕、八尾出身とちやうどかまへん？」と木村が言うと「八尾で創業してんねんから、いいんちやうか」と言う友人の返事。こういうやり取りの後、木村は友人と一緒に一柳と会った。

「第一印象はどうだったのか？」
「なかなか好印象で、画切れもいいしね。話もポイントをついで、引き付けられましたよ。」

木村は、一柳との出会いの最初の印象をこう語る。何よりざつぱららんな語り口に、柔らかな物腰で「役人らしからぬ人だな」という感じを受けたと述懐。

木村の本業・アパレルは消費者と直接、相対するわけで、行政の許認可を得て仕事を進めるような業種ではない。

「役人に頼むことは何もないんですよ。でも、この人なら、何でも話ができそうだな」と。以来、一柳と木村との間で、

貸し借りの一切ない関係が続く
類似商法と思しき
店の登場に…

その頃、木村の「世界最高品質の子供服をつくる」という思いは消費者の心を掴み、「ミキハウス」は大ヒットし始めた。子供服市場には、どんな現象が生まれたのか？

「偽物がいっぱい出だすんです。気づいたら『ミキスポーツ』とか、こちらのブランドと似たような名前とか、ややこしいのがいっぱい出て来た。」

そこで、木村が「ミキスポーツ」と看板を出している店に出向くと、「MIKIHOUSE」と書いた赤い紙袋が店内に置かれていてはないか。

店内には本物のミキハウスのトレーナーなどが飾ってある。でも、売っているのは「ミキスポーツ」という中国メーカーであり、「ミキハウス」ではない。

そこで「僕らは文句を言いに、行きました。届け出もないのに、これは何なんですか？」と。

美味しい一柳さん



一柳さんをお目撃「一粒で3度美味しい一柳さんの会」のパーティーにて

すると、相手からはこんな返事が返ってきた。

「店に私物を置いたらあきませんか？ この商品は、僕が百貨店で買ってきて置いてあるだけです。何か法律違反でもあるんですか？」

店内に置いてある「malicio」の店の責任者は「自分の私物」と言い張るのである。

「それで、これは類似商法だと思って、初めて一柳さんに相談したんです。何か、こういったやり方は法律でどうにもならんのか？」と言って、木村からすれば、自分たちが

一生懸命に知恵を出し、商品の企画を練って、また、縫製事業者と念入り打ち合わせを行って出来た商品・ブランドだといふ強い思いがある。

今で言えば、知的所有権を悪用した商法に近いし、絶対に許せないという木村の気持ち。とにかく納得いかないという思いを一柳に伝えたのである。

一柳の素早い対応に今も感謝！

木村が電話を置いて、問を置かず、一柳から折り返しの電話がかかってきた。

「木村さん、一回おいで。特許庁に連れて行くから」との返事。

類似商法に詳しい専門家もいる特許庁の担当官に、木村はいろいろ質問もし、法律的にどうなるのかを探った。

特許庁の担当官からは、いろいろ説明を受けた。件の店が類似商法になるのかどうか、法的な判断を下すのは難しいという話で、結論は出なかった。

そうすると、木村は泣き寝入りするしかないということか？

「それはもう当然、泣き寝入りです。法的に処理すると言ったって、秋物から次に替わるという時点のことで、その商品ももう無くなるでしょ。洋服は3カ月、4カ月で商品が入れ替わるから、訴えても、その商品がもう店に無いんだものね」

商売の世界にはいろいろな人がいるし、いろいろなやり方を考えるものだと、改めて認識させられたというか、とにかく苦い体験をした木村であった。

そんな時、一柳がこちらの悩みを知るや、素早く行動し、専門部署へ話をつないでくれたことに、木村は有難いと感じたし、その時の感謝の気持ちを今も忘れずにいるのである。

お互いに相手の立場を慮ってこそ……

経済人と役所の関係はどうあるべきか。

産業政策を立案する経産省はもちろん、自動車や建設業関係

は国土交通省と縁があるし、農水産業、食品関係の産業は農林水産省、スマートフォンや通信、IT技術関連なら総務省といった具合。

子供服づくり、つまり、アパレル分野に所属する木村にとって、普段は役所と顔を突き合わせているわけではない。

また、役所の規制を受けて、自分の経営の方向や方針を決めているわけでもない。

自由に、それこそ赤ちゃんや子供たちがスクスクと伸びやかに成長していけるようなベビー服・子供服づくりを打ち込んでいくということ。

役所にこうしてほしいとか、何かを頼むこともない。そういうアパレル産業の中において、当時、通産官僚だった一柳の立ち振る舞いを見ていて、木村はどう感じたのか？

「ある時、本当に、役人って、何でこんなに堅いんだろうと思えましたね」と、強烈な印象を残した出来事があったという。例えば、一柳が業界の会合に

出席していて、役所を代表して挨拶に立ち、乾杯の音頭を業界団体から頼まれた時のことを木村は今もはっきり覚えていて、「事務次官とか、上司に言われて、乾杯の音頭をとる役回りの時でも、乾杯が終わると、一柳さんはさっさと帰ってしまっんですよ。今日はパーティーなんだから、食事くらいしてあげないと動いても、いや、これからは自分の時間ですから」と言っ、ずっと引き揚げていってしまっ。そんな場面を何度か目にしましたよ」

民間人の木村としては、「なんで、そこまでやらなくちゃいかんの？」という感じだった。「役所の人間として、上司に自分の代わりに出席してくれと言われれば、そりゃあ出なければいけない。それで役所としての仕事が終われば、後は自分の時間だから」というのが、一柳さんの言い分なんです。彼は乾杯の時もアルコールは飲んでいなくて、コップの中身は水だったと思う(笑)」

木村は民間の企業経営者、一柳は役所に籍を置き、政策づくりに携わる身と、それぞれの立場や生き方がある。

2人が長い間親交を保ってられるのも、そうした互いの立場や生き方を慮っている間柄だからだということであろう。

人材を輩出する河内の風土

八尾は大阪・河内平野の中核的な場所。河内といえは、生きが良くて、一本気な土地柄として知られる。

作家・司馬遼太郎(1923年—1996年)も、そうした風土や人情をこよなく愛し、人気作家となった後も、中河内の布施市(現・東大阪市)に居を定めている。

布施からは、政治家の塩川正十郎(1921年—2015年)も生まれている。塩川は財務大臣や文部大臣(現・文部科学大臣)、運輸大臣(現・国土交通大臣)などを歴任。一本竹を通しながらも、時にトボケたりし

て、「塩爺」の愛称で親しまれた。「塩川さんも面白い人でしたね」と木村。人情味のある土地柄の河内から、いろいろな人材を輩出していることが覗える。

話を一柳に戻そう。一柳は1998年の通産省退官後、2000年に一柳アソシエイツの代表取締役&CEO(最高経営)に就任。埼玉大学大学院の経済科学研究科客員教授やテレビ・ラジオのキャスターをつとめ、ベンチャー支援の仕事に携わったりしてきた。

そして、2008年、経営者を育てる「一流塾」を開校。「毎年50人の現役社長や役員をつとめている若き経営リーダーを集めて、1年間みっちり塾で鍛えているんです。1年ごとに塾生は入れ替わりますが、上場企業の会長、社長もOBにいますよ」と、木村も一流の塾運営の手腕を評価する。

通産省関係でいえば、作家の堺屋太一(1935年—2019年)も元通産官僚。小説「団塊の世代」や「峠の群像」、「秀

吉夢を超えた男」などで話題を呼んだ。

知性社会(情報化社会)の到来を早くから察見し、首都機能移転などの提言は、世の中に大きな影響を与えた。

2019年に亡くなる直前まで、「財界」誌でも連載を続けてくれた人である。

「堺屋さんは関西の経営者の集まりで、よく話をしてもらいました。通産省の若手官僚の時は大阪万国博覧会(1970年)を企画したり、最後は「日本維新の会」の結成にも、大きな影響を与えたり、常に時代の先を説く方のある人でしたし、自ら時代を動かす人でした」

木村は堺屋との思い出についてこう語り、「何より大阪を心の底から愛する人でしたね」と堺屋の人となりを述懐する。

言ってみれば、木村も、一柳も、堺屋も、常に世界に目を見開き続ける者同士。人と人の信頼こそが、世の人々を前向きにする。

(以下次号)